

お姉ちゃんの不思議なクレヨン

やぎ みいこ

お姉ちゃんのクレヨンは不思議なクレヨン。このクレヨンで絵をかくと、なんでも本物そっくりになるのだ。

「まずはリングゴ」

お姉ちゃんは赤いクレヨンを手にとると、画用紙にリングゴの絵をかいた。すると絵のリングゴがふわりと浮かびあがり、本物そっくりのまるいリングゴになった。

「お次はバナナだよ」

今度は黄色いクレヨンでバナナの絵をかくと、またまた本物みたいなバナナになった。

「次は、次は？」

わたしがせかすとお姉ちゃんは「うふふ」と笑ってむらさき色のクレヨンを取り、まるいつぶがたくさんついた大きなブドウの絵をかいた。

ブドウの次はメロン。その次はモモ。部屋中がくだものでいっぱいになると、わたしたちは、くだもの屋さんごっこをして遊んだ。

わたしがかいたんじやだめ。このク

ぱりすごく大きい。

くつをぬいで紙の上に乗っかると、お姉ちゃんが聞いてきた。

「何をかこうか？」

「家にしようよ」

「オッケー」

お姉ちゃんは茶色いクレヨンで、まず最初に、紙いっぱい大きな四角をかいた。

「この四角の中を線でくぎって、キッチンとか部屋にするんだよ」

「家の広告みたいに？」

「うん」

なんだか、わくわくしてきた。お姉ちゃんは、まず大きな四角を二つに分けた。大きな部屋が二個できた。その内の一個のかに、はいい色のクレヨンで小さな丸が二つついた横長の四角をかいた。

「お姉ちゃん、それなに？」

「ガスコンロ。この丸のところでお湯をわかすんだよ」

「なるほど」

「で、となりがシンクでこっちは冷蔵庫」

シンクには、じゃ口や水を流すところをつけたけど、冷蔵庫はただの四角。

キッチンが終わるとまた茶色い線でくぎり、新しい部屋をつくる。その部屋のまん中に大きなこげ茶色の丸をかいた。

「お姉ちゃん、それなに？」

「ごはんを食べるテーブルだよ。ここはごはんを食べる部屋」

「丸いの？アニメででてるのみたいだね」

「ちやぶ台つていうんだよ。この部屋は畳の部屋にしようつと」

言いながら緑色で床をかるくぬりつぶし、終わると部屋のすみに黒い長四角をかいた。

「これはテレビ。ちょっと小さいかな？」

お姉ちゃんはテレビの四角を少し長くかき足した。

レヨンは、お姉ちゃんがかかかないと本物みたいにならないのだ。

ある日、わたしとお姉ちゃんがリビングでテレビを見てみると、お父さんが長い棒みたいなものを持ってきた。二人におみやげだよ。すごいだろう」棒は、くるくるつと巻かれた大きな紙だった。お父さんに「ありがとう」を言ってから、二人でほじめてみると、リビングでは全部広げられないほど大きかった。

「お姉ちゃん、庭で広げようよ」

わたしが言うとお姉ちゃんは、

「いいアイデアだね」

と言つて、紙をもとのように巻きなおした。大きなり巻きみたいになった紙を、二人で「よいしょつ」と持ちあげて、まげないように注意しながら外に持っていった。

庭の芝生の上でいっぱいに広げると、芝生が全部かくれてしまった。やつ

「お姉ちゃん、子ども部屋もかこうよ」

「ちよつと待ってね。先にお風呂と洗面所をかいてから」

お湯をためる湯ぶねをかいて、洗い場にはシャワーもつける。お風呂場となりが洗面所。手を洗う所もつけな。くちや。その下を細長いろう下にして、ろう下の下を二つに分けた。一個はお母さんたちの部屋で、もう一個が子ども部屋。それぞれの部屋にベッドやタンス、本箱なんかをかいて、

「できた！」

お姉ちゃんは笑いながらわたしを見た。

「お姉ちゃん、玄関がないよ」

「あ、やばい、やばい」

お風呂をちよつとけずつて玄関をつくり、こんどこそ完成だ。二人でいつしよに紙から下りた。すると、お姉ちゃんがかいたクレヨンの線がにゅーつと浮かびあがり、茶色いカベができた。最後にかいた玄関には、小さなドアがついている。

「わあ、家になった。でも屋根がない

ねえ」

「わたしが言うとお姉ちゃんは、『屋根を取って、上から見た絵だからねえ』と残念そうに言った。でも、本物みたい。わたしたちは玄関のドアを開けて中に入った。

くつをぬいでろう下へあがると、すぐに子ども部屋の入り口がある。中のぞくとベッドや本箱がちゃんとあった。お姉ちゃんのかいたとおりだ。

ろう下をまつすぐいくと、そのままキッチンに入った。右がわは畳の部屋だ。

「あ、ちゃぶ台だ！」
わたしはちゃぶ台にかけよって座ってみた。目の前には大型テレビ。

お姉ちゃんはキッチンでじゃ口をひねっている。じゃーっと水が出る音がした。

「ここで、おままごとしようか」
わたしが「うん」と言うと、お姉ちゃんの本当の家へもどっていった。ちゃぶ台で待っていると、画用紙を持った

お姉ちゃんが、すぐにもどってきた。

「まずは、おなべとおたま。それから、お茶わん、おわん。お皿におはし」

「ちゃぶ台の上に画用紙を広げて、お姉ちゃんがクレヨンでかくと、次々に食器が出てきた。

「お姉ちゃん、食べものもかいて」

「オッケー」

「おざぶとんも」

「オッケー」

わたしが言うと、お姉ちゃんはどうにかいてくれるので、家の中はあつという間に、色々なものでいっぱいになった。ずっとここに住めそうならいだ。

ひと通りそろったところで、おまま

ごとののはじまり、はじまり。

最初はわたしが子どもで、お姉ちゃんがお母さん役だ。

「朝ですよ。起きなななこ」

子ども部屋のベッドでねっていると、お母さん役のお姉ちゃんが起こしにきた。

その後、二人で楽しく遊んでいたけれど、だんだん夕方になってきた。「二人とも、そろそろ家に入りなさい」

本物のお母さんが、本当の家から出てきた。庭に干してあった洗濯物を取り込みにきたのだ。お母さんは洗濯物を全部家の中に入れて、わたしたちの家に入って来た。

「まあ、ずいぶんと大きな家をかいたのね」

そう言いながら紙のはしでサンダルをぬぐと、なんと、かべをすりぬけて入ってきた。

「だめだよ、お母さん！そこはかべなんだから」

お姉ちゃんが注意すると、お母さんは、「え、え？」と言いながら後ずさりして、冷蔵庫の上で立ち止まってしまった。

「そこに立つちゃだめ！冷蔵庫なんだから」

「あ、ごめん、ごめん」

「まだ、ねむいよ」

「だめですよ、今日は学校でしょ」

畳の部屋へ行くと、ちゃぶ台の上に

ごはんと目玉焼きがあった。

「わあ、本当に食べられそう」

お姉ちゃんが、本物のお母さんみたく

いにおなべを持って入ってきた。

「はやく食べちゃいなさい。遅刻するわよ」

「それなに？」

わたしがおなべをさすと、ホカホカの湯気がたつたおみそしるが出てきた。

「お父さんは？」

「大阪へ出張よ。お帰りは明日ですって」

「へええ」

ごはんをせっせと食べるまねをして

いたら、なんだかトイレに行きたくなってきた。

「ねえ、お姉ちゃん。トイレって、どこだっけ？」

「あートイレかくの、わすれた」

わたしは急いで本当の家へもどった。

審査員コメント

お姉ちゃんのフレヨンで絵をかくと、何でも本物そっくりになります。画用紙のリンゴもバナナも。大きな白い紙にいくつも部屋をかいて、どんな大きな家ができていきます。お姉ちゃんと「わたし」の会話ですすむ、ずいぶん楽しい童話になりました。

宮川 健郎

やぎ みいこ

53才 主婦 埼玉県

受賞のことば

単調になりがちな毎日の中で、お話をすることは私にとって楽しみであり喜びでもあります。今回、このような素晴らしい賞をいただけることになり、本当にうれしく思います。知らせを受けたときは恥ずかしながらもワンワン泣いてしまいました。今後もこれを励みに創作活動を続けていきたいと思ひます。ありがとうございました。

